

クーパー嬢、「解けゆく風景」 1

村上清敏 訳

秋は空想にふけるには絶好の季節。アメリカのどこにいても、十

月の輝きに染められた木々の山々が目に入る。芝生や草地は紅葉の森で縁取られ、広々とした澄んだ流れは森の明るい色合いを映し出している。珍しい華やかな光景、見慣れない不思議な美しい光景が現れ、いつになく空想力をかきたてられる。奇異な異様なさまざまなイメージが際限もなく沸きあがり、頭が一杯になり、ついには足を止めて、見慣れない一帯の光景のさなかで、住人の姿が今までと変わらぬことを確認しなければならなくなる。再度見渡してみても、柱で支えられた小屋、木造の教会、煉瓦造りの交易所、窓がたくさんある細長い旅籠が一ヶ月前と変わらぬことを確認するのである。

今の季節に特有のインディアンサマーの靄が、ものを和らげる効果を發揮して、あたりの風景が一層幻想的となる。山々は一段と高くそびえ立つ。山塊は大氣のヴェールに包まれて、新たな威厳を獲得する。古い大理石像に布地が掛けられて、肢体の動きに優美さが加わり、像のプロポーションに気品が加わるようなもの。峰々が、低山が、これまでになく立派に見える。遠近感が拡がる。それでいて、個々の事物の間の相互関係が見事なまでに正確に露呈される。靄の助けを借りない澄んだ大氣の中では、往々にして、そうした相

互関係が見えてこないものなのだ。

アメリカの秋には、何かしら不確かなもの、気まぐれと言ってもいいものがある。だから、年ごとに新たな注意が喚起され、この季節が一層幻想的となる。春の美しさはもつとはつきりとした性格を持つている。毎年、新緑の時期、花の時期には、同じ色合いが浮かび出てくるのに対して、秋は、フランスの友人曰く「日々変わり行く^{エール}美」であり、気まぐれで、変化に富み、二日と続けて同じことはなく、昨日は陽気で華やかだったかと思えば、今日は気怠く、色褪せているといったふうである。山麓、森、一本の樹木が、年ごとにその姿を変える。雲、陽光、柔らかな靄、透明な霜が組み合わさって影響を及ぼすからで、カエデにしろオークにしろ、去年の十月は華麗な深紅に染まっていたのに、今年は、クリを思わせる黄金の衣装や、もっと地味な樹木のくすんだ黄色の衣装をまとう。去年は淡黄色であったトネリコが、今年は、濃い紫色をしているかもしれない。何が現れるか、誰にも予想はつかない。いつも何かしら変化が生じ、ときには、思いもかけない対比の妙が見られる。丁度、晴れ渡った一日の日没を待つときの気分。夕空の美しさは保証されているものの、どんな華麗な雲が、どんな真珠のような色合いが目を楽

しませてくれるか、誰にも予想がつかないのである。

十月初旬、柔らかな靄のかかった朝だった。遠くの小高い山々の頂は、ドームのような形をして、四方を囲み、頂を飾っている森は豊かなブロンズ色に染まっている。朝日に輝く隆起した山々は、まるでブロンズの装飾模様を施されているようだ。あちこちに、紅葉の盛りのベニカエデが点在していて、周囲を緑の森に囲まれている。近くにあるオークの若い木々にも、秋の冷たい露の影響が如実に見て取れる。たいていの葉はみずみずしい緑で、六月の新緑を思わせ、衰えとは程遠いのだが、それでも、いずれの木も、ところどころ、色鮮やかな明るい赤に染まっている。幹に近い小枝は、鮮やかな深紅の房飾りをなし、リボンが結ばれているように見える。若い騎士の団が、貴婦人の旗印を胸に歩く姿を空想する人もいるかもしれない。近くにあるハナミズキは、繊細な幹と軽やかな枝をして、豊かな湖を思わせる独特の色合いに輝き、森の貴婦人と呼ぶにふさわしく、その両脇を護る騎士然としたオークの胸に、美しい婦人の旗印がちらちらと揺れている。カエデのちっぴけな苗木は、繊細な小さな葉をつけており、これもまた紅葉している。赤、深紅、ピンクとそれぞれ好みの色に染まっているので、秋の森の根元近くに、新種の花が開花したかに見える。

私たちは倒れたマツの幹に腰をおろしていた。突き出た崖の近くで、そこからは、あたりの景色が十五マイルかそれ以上も見渡せた。湖、田舎の町、遠くの谷間の農場が足下に広がり、まるできれいな地図を見ているようだ。頭上のオークの枝の間で、アオカケスの群れがけたたましくお喋りをしている。また、近くの別の木からは、

リスが忙しく動き回りながら実を落としている。冬のクリの蓄えをしているのだ。穏やかな南風が紅葉した森をそよがせて吹いてくる。森のそよぎには、すでに秋の響きがある。季節の変化とともに、森の音にも違いが生ずる。冬には、裸の枝が揺れるので、森を抜ける風の深い悲しみはユニゾンとなる。夏には、葉叢がそよぐので、全体のハーモニーに高い音色、陽気な音色が付け加えられる。また、初夏のみずみずしい葉叢の柔らかなつぶやきと十月の乾いた枯れ葉の鋭い音色とでは、調性も異なっているのである。

我らがアメリカの秋の輝かしさには、どことなく社交的な気分がある。紅葉した森の輝きは、人間の目を楽しませるためのものであるかに見える。紅葉の初めの頃は、お祭り騒ぎの気分が漂っていて、この季節の心楽しい労働にしっかりと合っており、豊かな風景は、果樹園での収穫祭を思わせる。いまだ我が国の多くの地域には原生^{ダネス}自然が残っているが、私なら、この季節をそうした原生自然^{ウィル}の中で過ごしたいとは思わない。際限なく広がる森の中をさまようのにふさわしい季節は、冬か夏であり、十月には、人が住む地域に戻ってきたいと思う。どこまでも延び広がる森は壮大な景観には不可欠ではあっても、断続した森、点在する林、孤立した木立もまた、そこには必要なのである。人の手の入った静かな耕作地、心楽しい住まいも、喜ばしい光景を作り上げるにはなくてはならないものだとな得する。しかり。足下に広がる谷間の秋の風景は、現在のように雑多な局面を持つからこそ一層素晴らしいのであり、昔のように、一面が森に覆われているは、これほどのことはなかったに違いない。人の手が入ると、おおむね、風景は改良される。大地は人の手

に委ねられたのであり、エデンには人がいるのが自然なのである。

人がエデンの園に生命と魂を吹き込むのである。人が労働者や農夫としての真の役割を放棄してそれ以上を目指すとき、創造主の役を自任して、土砂を積み上げて山を作り、川の水をポンプで汲み上げ、石を撒き散らし、人工滝を作るとき、そうしたときにこそ、人は失敗するのである。谷間の緑したたる草地、山麓を這い上る曲がりくねった山道、川の堤にひらけた心楽しい村、通常、そうしたものは風景に彩りを添えてくれる。すなわち、風景に何かが欠けているとするなら、それは正しい判断力や思慮分別の欠如が明白なとき、または、自己中心的な貪欲さや浪費の証拠が明白なときである。森を裸にして、ポケットを金銭で満たしたり、自分の世代のための薪として消費してしまうなどというのがその例である。

とてつもなく規模の大きな風景、風景そのものが際だっている場合には、人間にまつわるものがそこにあっても、最初は、それがまったく目に入らないということがある。谷間には気がついて、人の住む村には気づかない。曲がりくねった流れには気がついて、釣り人の小舟には気づかない。しかし、こうした場合であっても、雄大な風景がもたらす鮮やかな第一印象の後には、はるかに規模の小さな住まいにしばし目を留めて楽しむのである。遠くの地平線と境を接する、雪を戴くアルプスの荘厳な山並み^{サブライム}が広がるリギ・クルマをさまよった後には、足を止めて、近くの谷間の寒村から立ち昇る煙に、山麓に点在するシャレーに、湖を横切る小舟の白い帆に気づくのだ。

人間の痕跡など何も見えない荘厳な風景——中央アジアの気が

滅入るような単調なステップ、アフリカの不毛な砂漠、人跡未踏のアンデス山地、アメリカの際限もなく広がる森——の中にあつてさえ、何より印象的なのは、人間の生活が営まれていないという点である。地球の他の地域には知的な生物が生存しているからこそ、そうした生物によって精密な地図が作られ、その労働の刻印が記されているからこそ、こうした妙に隔絶した場所がもたらす対比に、放浪者は胸を打たれるのである。

この世には、人間以外に数え切れないほどの生き物が集団となつて住み着き、ひとつの地域に群がっている場合もあるが、地表に何かを刻印しても、巡る季節の風雨に抗してそれが残っていると、いう事例はほとんどない。ところが人間の場合には、もともと野蛮な状態にあつてさえ、何らかの要塞を築いたり、英雄たちの遺骨の上に巨大な不格好な構築物を積み上げており、それは、全人類が消滅した後も生き残ると思われる。ヨーロッパの南東部は広大な平地であり、多くの点で、中央アジアのステップもしくは我が国の広々としたプレーリーに似ている。最近まで、そこには人の住まない荒れ地が広がり、耕作された土地はまったくなかったが、草が生い茂るこうした隔絶した場所のまっただ中に、粗末な古い塚や古墳が幾つも立っていて、その起源は有史以前にまで遡る。遊牧の羊飼いの民が何世代にもわたつてこの地を行き来していたが、こうした塚の歴史については何も知らなかった。同じような古墳が西アジアにも数多く存在しており、我々がアメリカ大陸にある塚と同様に、古代の粗野な人種のものであると思われる。こうした土による昔の構築物、巨大な堆積物は、作者名こそ明らかではないものの、ある種の関心を

引き起こさずにはおかない。というのも、そうした古代の遺跡の上には神秘感が漂っていて、後の時代の記念碑、石造りの誇らしげな造営物をもしのいでいるから、この点においては、自然の営為と似ており、こうした塚も、同様の深い秘密をたたえているように思われるからである。今なお残るこうした素晴らしい古墳や塚は、周囲の風景にさしたる効果を与えているわけではないが、それでも、長い間その場に佇立していたという事で、重要な地位を占めている。人がかつてはおのれのものと呼んだ土地に、独自の性格を与えているのである。

それに続く時代の記念碑は、もっと熟練した人々の手になるものだけに、はるかに立派である。実際、人は自然をモデルとして模倣してきたくせに、建築技術を習得するとすぐに、自然の営為の持つ威厳と永続性に張り合おうとしたかに見える。自分が作り上げた巨大な石の壁が、石を切り出した岩に負けないくらい長くその場に立ち続けるようにと、自分が作った円柱やアーチが、モデルとなった樹木や枝とともに生きながらえるようにと念じた。みずからが造営した誇らしいバベルの塔と天体とを張り合わせるつもりでいた。そうした建築物の耐久性は、現在に至るまで、古代の一番顕著な特徴のひとつとなっている。現在のどんなに優れた建築家でも、巨大な石の塊を目の当たりにして、驚異の念に打たれてしまう。古代の国々は、みずからの意志で、そうした巨石を輸送し、持ち上げたのである。驚きのあまり、建築家の中には、当時は特殊な動力装置を所有していたが、それが後世には継承されず、我々にもそれが再現できずにいるのではないかと推測する人もいる。確かに、人間の技が作

り上げた建築物の中で、最初の大いなる建築家の手になる最古の構造物こそが、もっとも耐久性に優れ、堂々としているというのは紛れもない事実である。バビロンを崩壊させるのに、どれだけの世紀を要したことか。幾つもの時代にわたって、バビロンの尖塔群の上には破滅の呪いが予言となって漂い、十世代以上に及ぶ人々がバビロンの町に対して暴力をふるい、さまざまな国家がつぎつぎと破壊作業に取り組み、しかる後にその呪いは成就され、町の誇りは塵芥と帰した。なのに今なお、周囲に広がる平坦な荒地の上には、廃墟が、原形を留めぬとはいえ、その跡を刻み込んでいる。インドの古代の寺院を見ればいい。素晴らしい建築物が残るエジプトを見ればいい。あのピラミッドが崩壊する前に、現代のすべての誇り高い建物は崩れ落ちてしまうだろう。ピラミッドは、これまで千年もの過去の歴史を黙したまま目撃してきたように、地球の物語の最終幕を目撃するかもしれない。ピラミッドがなければ、周囲に散らばる同時代の記念碑がなければ、エジプトの平坦な土地、泥だらけのナイル河にはどれほどの値打ちもない。

もっと時代を下った、ギリシャやローマの建築物を見ればいい。幾つもの時代にわたって、ギリシャ・ローマは野蛮国家の絶好の餌食となったが、何百万人もの野蛮人の怒りをもつてしても、記念碑のすべてを破壊しつくすことはできなかった。古代国家ギリシャ・ローマの崩壊した寺院、劇場、墓地、水路橋、橋を調べるといい。その素晴らしさ、美しさに比肩するだけの、どんな建築物を私たちは持っているのか。何千年もの間、こうした建造物は立ち続け、その土地の高貴な紛れもない一部であった。シビルの小さな寺院は、

現代人の目には、周囲の丘陵地帯やチボリの谷の不可欠な一部と見える。常緑のオークやオリヴの木々、寺院の足下の岩に飛びかかる流れと同じく、風景の一部と見えるのである。壊れた水路橋がなければ、古代の墓地がなければ、ローマ平野には何の値打ちもない。ローマそのものも、廃墟がなければ、何の値打ちもない。七つの丘に、周囲の広大な平原に今なお素晴らしい美しさを与えているのは、昔の建造物の遺跡であり、こればかりは、現代の建築物には——たとえどんなに立派なものであっても——真似ができないのである。

古代の人々がこのような高貴な仕事を引き受けてくれたのは、私たちのためを思つてのこと。何かしら神の御意志が働いて、それで彼らがこうした永続的な記念碑の建立を思い立ったと信じてもいいのではないか。私たちのために、建立してくれたのだ。ピラミッドであれ、バベルやパエストウムの建築物、コロセウム、パルテノン神殿といった同時代の建築物であれ、これらは人類共通の遺産である。その影響力はそれぞれの土地にのみ限定されるのではない。時という名の太陽が巡航を終えて沈むとき、その影は大地全体に伸びるのである。

中世には、ヨーロッパはキリスト教国家となり、あたりの風景の性格を決定するほどの重要な建築物はすべて二つに大別された。ゴシック建築の教会や大修道院、ならびに戦闘に備えて要塞と化した城がそれである。宗教にまつわる建築物がもつとも大きな広がりを見せた時代が、とりわけ戦闘の時代でもあったというのは、とても奇妙なことだ。だが、こうした戦闘的な気分が蔓延していたからこそ、君主制の増強につながった。谷の周囲に広がる十以上の丘

がその頂きに城塞を構えているとするなら、また、領主同士の間で五つもの戦がおこなわれ、周辺一帯が荒れ地と化してしまうとするなら、キリスト教社会たるもの、平和の館が少なくともひとつ、谷の草原に、城塞の尖塔から見える位置に、建立される必要があった。時代の暴力性そのものが、当時の宗教の持つ迷信的な性質とあいまって、教会が大きく富裕になる原因となった。フランスのルイ十一世は、毎朝、なにがしか残酷な、背信的な振る舞いに及んだが、夕方には、教会や大修道院に金銭的な施しをおこない、免罪符を購入しようとした。当時は、同様の手続きによって良心が慰められる勇敢な騎士、男爵がたくさんいたのである。

中世の建築物からは古代文明の多くの部分が欠落してしまっているとはいへ、その耐久性は今なお際だっている。当時の大聖堂、城、橋の中には、そこそこに見られる少数の例外は別として、現代の大聖堂、城、橋よりも耐久性に優れているものがある。おそらく、我が国に現在建っている建物が崩壊しても、中世のそうした建築物は残るのではないか。ヨーロッパのもつとも鄙びた地域に、当時の橋が幾つか架かっている。深い激流を跨ぎ、崖から急角度でせり上がっており、設置されている場所が危険このうえないゆえに、後世の人々は、そうした橋に魔術的な起源を与え、「悪魔の橋」と呼んだ。封建時代の城塞が幾つも残っている。あまりに巨大な壁ゆえに、城を取り壊すようにとの命令が出された後も、作業は放棄されたままだ。巨大な大聖堂が幾つもある。その高貴なる尖塔は町の家々の屋根よりも高くそびえ立ち、幾つもの時代を経て、建立が続けられている。こうした大聖堂の中には、いな、その多くは、建築家の大い

なる意図を実現すべく、膨大な経費と膨大な時間がかけられながら、現在に至ってもなお、未完成のままである。当時の建築家は未来のために建築したばかりではない。後世の人々が自分たちの作業に参画してくれることを期待した。ひとつの世代が倒れて墓に休もうとも、次の世代がこの敬虔な作業に従事してくれることを期待したのである。

アメリカ人がこうした封建時代の遺跡を見たり、当時の半ば崩壊した城壁の前に立っても、異邦人として何の感慨もおさないうちは言い切れない。ある意味では、私たちもまたそうしたものに関心を持つている。あの跳ね橋を横切った大地主、壁を作った石工、彼方の崩れた砦の旗の庇護の下にあった農夫の中に、我らの祖先がいなかったなどと、誰に言えるだろう。いずれにしろ、キリスト教の国に生きている者にとっては、良きにつけ悪しきにつけ、現在の運命は、騎士道精神と迷信に溢れる当時の時代に、ある程度は規定されている。文明化された現代社会全体にも、そうした時代は息づいている。我々アメリカ人は、現在のフランスやイギリスの住人であると同時に、当時のヨーロッパで生活していた人々の子孫でもあるのだ。

こうした古代の記念碑は広大な地域に広がっているだけでなく、ひとつの土地にドルイド教のもの、古代ローマ様式のもの、ゴシック建築、ルネッサンス様式、現代のものが併存しているので、現在の住人に先立つ数え切れないほど多くの人間が群れ集い、旧世界の表面に人類の刻印を刻んでいたことが、図解で見る以上にはつきりと了解される。平原、丘、谷、崖、むき出しの巨大な山、島、そう

した地域にある洞窟、すべてのものに古代の人間の印が刻まれている。平原にはローマ時代の道路の遺跡が見られる。谷や島は昔の修道院があつた場所であり、おそらくは、さらに古い村の跡地でもある。丘、崖、山の上には封建時代の塔の遺跡がある。人里離れた溪谷や洞窟は、盗賊や無法者の一団もしくは孤独な隠者の隠れ家であつた。

旧世界の洞窟、とりわけシリア、アラビア、エジプト、ギリシャ、イタリアといった東部および南部の国々の洞窟は、それぞれ、奇妙な物語を持つている。その多くは強固な要塞として使用され、パレスチナやエジプトの洞窟のように、攻撃に次ぐ攻撃にも屈しないでいる。その他の洞窟は盗賊や海賊の隠れ家とされている。高くて接近が不可能と思われる崖の表面に刻まれた多くの洞窟は、墓地として利用されていて、外部同様に内部にも彫刻が施されている。こうした事例は、シリアや他のアジアの地域に多く見られる。南イタリアでは、アペニン山脈の崖の表面にたくさん洞窟がある。下の谷間を走る公道からその入口がはつきりと見える。そうした洞窟は、イタリアが野蛮な異教徒の国家に侵略された折には、キリスト教徒の隠者の隠れ家となつていた。おそらく、東部諸国の自然の洞窟は、もともと初期の人々の最初の住まいだったのだろう。だから、そうした古い国々では、人がみずからの存在の跡を記さない自然の事物などは、ひとつたりともないのである。マクペラの洞窟からアルプスの山の頂上にいたるまで、それが言える。山頂では、空を背景に、淡い灰色の十字架が立っているのがかすかに遠望される。

我が国の状況とは何たる違いか。我々が父祖が驚くべき速さで原

生自然の森を文明化し、人が溢れる土地に変えたというのは事実だ。だが、アメリカの文明は生まれたばかりであり、旧世界のそれとは外見がまったく違っている。この国には、古いものと新しいものの混在はない。古いものは何もない。たとえ遺跡が残されているとしても、それを保全したりはしない。そうしたものは引き倒されて、何か新しいものに場所を譲ってしまう。ニューヨークにあるオランダ人の最後の家が姿を消してしまったが、こうした傾向を示す典型的な事例と言えるだろう。長い間、ニューヨークの古い地区には、ああいう歴史的な道しるべがたくさんあった。ところが今では、最後の高い破風が、最後のオランダの壁が、ニューアムステルダムから姿を消してしまった。たいしたスペースを占めていたわけではなく、オランダの名前がついた通りの一面に立ち並び、おそらくはオランダ人の子孫の所有になる家々なのだから、古い時代の遺跡が、少なくともひとつは保全されてもよかったのと思う。ところが、違ふのだ。我が国では、保全の逆を行くのだ。町の起源を示す記念碑をひとつその場に残すことすら、期待しても無駄なのである。

私たちアメリカ人は、文明の境界に住んでいる。だが、あくまで十九世紀に生きているのであり、今は精神的、物理的な距離がすべて縮小している。おまけに、境界に住む人間であるだけに、私たちは開拓者として行動することも多く、時代の傾向は、ヨーロッパ以上にここアメリカの方が顕著なのである。現在の文明は、昔の文明に比べると、はるかに繊細な性格を持ち、その成果も当然ながら繊細なものとなっている。影響力が強く、重要ではあるが、威厳や外見の押し出しには欠けるのである。地上から現代文明特有の多くの

美点をすべて消し去るのは、比較的容易だろう。現在ロンドンにある壮大なガラスの宮殿、いかにも時代を反映した華やかな宮殿にしても、数時間もあれば、完全に取り壊されてしまうだろう。軽量の吊り橋を見るがいい。確かに素敵ではあるが、壊すのはいとも簡単なこと。鉄道を、船を、蒸気で動く工場を見るがいい。素晴らしい電信を見ればいい。銀板写真の驚異を見るがいい。何であれ、現代特有のもっとも優れた業績を見るがいい。そうしたものの痕跡は、いとも速やかに地上から拭い去られてしまうのである。すべての技術の中でもっとも重要な技術、印刷の技術が他のすべての発見を保存してくれるはずだと言う人がいるかもしれない。それはそうだが、印刷技術を取り除き、生きのいい野蛮人の群れを連れてきて、文明世界の一帯に撒き散らし、破壊活動をおこなわせてみればいい。こうした業績のうちで、我々が時代の記念碑として一体どんな痕跡が地上に残るだろうか。おそらく、アメリカに関して言うなら、東の文明がこの国を通過した唯一の証拠は、混在する植物、樹木、草木の様、旧世界の雑草の存在のみとなるだろう。

アガシ教授の説によれば、現存する地球の表面としては、北アメリカこそが最古の地表とのことである。教授が言うには、我らの植物・動物は、多くの点で、東半球のそれよりも古い時代に属しているとのことだ。ヨーロッパにはヒッコリーの化石、ガーパイク属の化石がある一方で、ヒッコリーやガーパイク属は現在、世界の中でも北アメリカに限定されているとのことだ。だが、この説を疑うわけではないが、アメリカには特異な点が幾つもあって、そのせいで、東半球で観察される以上に、アメリカは若いという印象を覚え

る。ヨーロッパ、アジア、アフリカには、古い、擦り切れた、疲弊した外観を見せている地域がたくさんある。不毛な山岳地帯、裸の原野、不毛な砂漠や平原がそうだ。北アメリカでは、逆に、本当に不毛と言える地域はほとんどない。概して、広々とした豊かな森、豊かな水資源は、おのずからアメリカの風貌を陽気なものとしている。その一方で、丘や山のなだらかな形、植物に覆われている様は、それを見る者の心に、アメリカの若さを印象づける。東半球の国々の急峻で岩だらけの山頂、細い流れ、広々とした裸の平原とは比較にならないのである。

アメリカの建築物は華奢でその場限りの性質を持っているが、だからこそ、若いという印象が強くなる。事実、我が国の建築物が堂々としているなどということはめったにない。我が国の石工技術や大工仕事の主たる特長は——とりわけ、細部が仔細に点検されない大量の仕事の場合には¹⁰——陽気さが美点である。それは、フランスやイタリアの技術に見られるような、軽やかな優美さとは異なっている。イスラムもしくはアラビアの華やかさも違う。独自の性質を主張するにはあまりにとりとめがなく、不確定なのだが、それでも、快適さと質素さが全体に漲っており、規模の大小を問わず、私たちの住まいの大半にそうした性格が映し出されていて、それなりに満足感を与えてくれる。

十月の森で、倒れたマツの木に腰を下ろして、あたりを見渡ししながら、私たちはこのような思いに駆られていた。家路に就く前に、一種のゲームを楽しんだ。建築がもたらす結果を、先の空想の続きを見届けることにしたのである。私はアメリカマンサクの小枝を一

本折り、それを谷の上から振って、魔法をかけてみることにした。アメリカマンサクにはそうした力があると、長い間言いならわされているのだ。絡まりあつた黄色い花で飾られた、二股に分かれた枝を右に左に振ると、たちまち、奇妙な現象が起こった。村の入口の木製の橋が流れの中に落ちて、姿を消してしまった。裁判所が消えた。七軒の旅籠がなくなつた¹¹。十軒以上の商店も魔法で消えた。教会も例外ではなかった。百軒の住宅も同じ運命を共有して、煙突から立ち昇る煙のように、消えてしまった。しかし、私たちには村を打ち壊したままにしておくつもりはなかった。だから、再び葉のないアメリカマンサクの枝に頼ることにした。枝をもう一度谷の上で打ち振ると、見る間に、大地から森が生まれてきた。一種類だけの、十分に成長した樹木からなる森であり、周囲の森と同じように、秋の彩りに染まっている。だが、消えた村の敷地にこのような森が再び現れるだけでは、一時の気まぐれは満たされなかった。再びアメリカマンサクの枝を、上下左右に勢よく振ってみた。すると、激しい震動で、絡まりあつた黄色の花びらが枝からちぎれて、風に乗り、あたり一面に散らばった。おそらくは、花びらが魔法の力を増加させたのだろう。次の瞬間、私たちを夢中にさせてしまうような光景が見られた。もしもこれまでヨーロッパ文明がそのまま持ち込まれていたとするなら、谷はどんな様相を呈していたか、それが見たいというのが私たちの夢だった。もしも、ヨーロッパの轍を踏んでいたとすれば、人々は、谷をどんな図柄に描いていただろう。驚いたことに、今や私たちのその夢が叶えられたのだ。だが、これがさつき消えたばかりの村の敷地であると分かるには、仔細な点検

が必要であった。あらゆるものがすっかり変わっているのだ。しかし、すぐに分かったのは、風景を形成している自然の諸要素は昔のままだということ、湖の輪郭は同じように湾曲しているし、小山の位置も一緒だということだった。植物の生育状態は私たちが長い間知っているままであり、秋の森の彩りは、一時間前そっくりだった。だが、似ているのはそこまでだった。丘陵地帯の多くは、樹木が刈り取られて裸であった¹²。農場や住居の位置は、すっかり変わっている。小さな町のつもりで見下ろすと、たんなる寒村¹³に縮小してしまっている。背の低い、絵のような、藁葺き小屋が、草の茂った幅広の通りに沿って、また、村の中心をなす広大な公有地の周辺に、不規則に寄り集まっている。この草の茂った広々とした公有地の中には、大きな石造りの十字架が立っている。見事なデザインと精巧な彫刻が施されており、何か歴史的な出来事の記念碑であるに違いない。一軒しかない小さな旅籠が、公有地と十字架に面して立ち、戸口には大きな看板が重そうに揺れている。この寒村の最大の建築物である教会は、とても古いものであるらしく、かなりの敷地を占めており、低い壁は、切り出した石で造られている¹⁴。教会の東側の側面には大きな豊かな窓がつけられ、反対側からは優美な尖塔が立っている。二、三軒の小さなつましやかな商店が、そこが交易所であることを示している。橋は巨大な石を切り出して造られ、幅が狭く、急勾配のアーチ型になっている。そばには、崩れた塔がある。農場は生け垣¹⁵で区切られている。生け垣はまた、細い道路の両脇の縁取りをしている。近くに数軒の田舎屋が見えるが、堂々たる構えのもの、そうではないものとさまざまだ。かわいい藁葺きの

小屋が一軒ある。正面には大きな見晴らし窓がつけられ、楽しげな花畑が小屋の周囲を取り囲んでいる。それから、村のすぐ外れに、かなりの大きさの敷地がある。古い田舎の邸宅らしく、六、八世代前のものであると思われる。壁は煉瓦造りで、煙突は古風で趣があり、しかるべき角度がつけられ、軒蛇腹の縁取りがされ、建て増しがされている。この敷地は公園と呼んでもおかしくはない¹⁶。芝生でシカが草を食んでいる。はるか彼方、湖の西岸には灰色の石造りの城が建っている。六つもの尖塔が丘の麓から百フィートも高くそびえている。この広々とした領地には、美しい芝生と広々とした森がある。建物自体も手入れが行き届き、人が住んでいる様子である。絶景の地に、村から一リーグほど離れた湖に突き出すようにして、崩れかけた修道院が建っている。今では、ただの農家に落ちぶれている。ローマ時代の道路がかつてその方角に走っていたとか、昔は同じ場所に大邸宅が建っていて、修道分院とされていたとか、そこからは古い貨幣がときおり掘り出される、といった囁きがどこからか聞こえてくる。谷を抜ける近代的な公道は、完璧そのものである。崖の上から、少なくとも九つの寒村が見える。足下にひとつあるのに加えて、二つの寒村が湖畔に位置している。さらに三つの寒村が、丘の側面に、昔、中世の城塞が建っていた敷地あたりに、寄り集まっている¹⁷。別の寒村が川の堤にある。長らく砦として用いられてきた場所だ。さらに二つの寒村が、谷のそれぞれ違った場所にある。かわいい灰色の尖塔もしくは教会の低い塔が、こうした寒村のほとんどの上にそびえ立っているのが見える¹⁸。北の方角、一番遠い丘の頂上では、木々の頭上から、昔の監視塔の残骸が顔を覗かせてい

る。

私はこれ以上の観察をおこなうことはできなかった。手にしていたアメリカマンサクの黄色い花を、あたりをうろつくミツバチが見つけ出してしまったのだ。ミツバチはここ数日の最後の暖かな日々を有効利用すべく、蜂蜜の最後の滴を収穫するのに余念がなかった。この小さな生き物が指の近くに忍び寄っていたのである。鋭いひと刺しですぐに空想から覚めた私は、枝とミツバチの両方を手から落としてしまった。魔術を引き起こすアメリカマンサクが投げ捨てられ、魔法は解けてしまった。あたりは、いつもの様相を取り戻したのだった。

註

- 1 本稿は Susan Fenimore Cooper, "A Dissolving View" の全訳である。『*The Home Book of the Picturesque: Or American Scenery, Art, and Literature. Scholars' Facsimiles & Reprints.* Gainesville, Florida, 1967 (原著の出版は一八五二年) を底本として使用した。近年、「真の意味で重要な、アメリカ最初の女流ネイチャーライター」(ローレンス・ビュエル)として、スーザン・フェニモア・クーパーの再評価がおこなわれつつあり、研究対象も、スーザンの代表作である『田舎の生活』から、それ以外の、自然を描いた著作へと広がりを見せようとしている。魅力的なタイトルを持つこの小品、「解けゆく風景」もそうしたその他の作品のひとつである。アメリカとヨーロッパの風景は本質的に異なっているとする、強迫観念にも似た意識が本作品の根底にあ

- り、それが当時の読者には共有可能な暗黙の了解事項となっていたらしいのだが、現代の日本の読者には見て取りにくい箇所も幾つかある。さいわい、本作品が収録されている『家庭版ピクチャレスク』には、スーザンの父であるジェイムズ・フェニモア・クーパーの、その名もずばり、「アメリカとヨーロッパ、その風景の比較」というエッセイも収録されており、必要に応じて、父の評言を「解けゆく風景」への脚注として借用することにする。少なくとも二人の間では、アメリカの風景に関する、また、米欧の風景の差異に関する認識が、すべてとは言わないまでも、相当程度共有されていたと想像されるからである。なお、鍵括弧の後の頁数は、底本とした『家庭版ピクチャレスク』の頁を示している。
- 2 ドームのような形をして——「我が国ではほとんどどこでも、山頂は丸い輪郭をしている。」(六八)
 - 3 断続した森、点在する林、孤立した木立——「ドイツは幾つかの点で、アメリカの風景にとてもよく似ている。ドイツは、南や東にある国々とは違い、孤立した雑木林や小さな林にさして不足してはいない。」(六〇)
 - 4 人の手が入ると、おおむね、風景は改良される。——「我が国では……時間、人口、労働が不足していて、自然の欠陥を埋めるには到っていない。」(五五)「技術と自然の結合のみが風景を完全にしうる。」(五六)
 - 5 雪を戴くアルプスの荘厳な山並み——「概してヨーロッパは、我が国以上に荘厳で雄大な風景を五感に提供すると言える。」(五二)「大西洋のこちら側には、何百年もの雪を戴く山頂はな

い。」(六八)

6 ゴシック建築の教会や大修道院、ならびに戦闘に備えて要塞と化した城——「アメリカでは、壊れた城や大修道院、皆にすら出会う機会はない。」(六〇)「アメリカには城はなく、要塞の町の必要性もなく、この種の構築物が社会の普通の施設となる時代には、アメリカはまだ存在していなかったのだ。」(六六)

7 その耐久性は今なお際だっている。——「中世の時代には、：ヨーロッパの町々を防衛するための軍事施設が建築された。材料が耐久性に優れているため、そうした施設は現存しており、風景を彩るための、想像しうる限りの最良の効果をもたらすことも多い。むろん、アメリカにはその類のものはない。」(六六)

8 北アメリカこそがもつとも古い地表とのことである。——「この理論(アメリカがヨーロッパよりも、地表の起源が新しいという理論)は現在、明確な反対意見にあっている。」(六七—六八)

9 アメリカは若いという印象を覚える。——「大方の目には、アメリカはみずみずしく、若さに溢れる印象を与えることは認めよう。」(六八)

10 とりわけ、細部が仔細に点検されない大量の仕事の場合には——「アメリカとヨーロッパの風景の大きな違いは、総じて、前者には最後の仕上げが欠けている点だ。」(五二)「我が国の風景は驚くばかりに美しい。ただし、十分な広がりを持ち、細部の仕上げの欠如が隠せる場合のこと……」(五四)「そういうときには、風景の気品が目に見える一方で、細部の欠陥が遠くで見えないからである。」(六一)「だが、こうした二流の河川の流域で

は、通常、何かが、最後の仕上げが欠けている。」(六二)

11 七軒の旅籠がなくなった。——「アメリカでは、……もつとも高く聳える屋根は、ほとんどいつでも、旅籠の屋根だ。」(六九)

12 樹木が刈り取られて裸であった。——「ドイツは、フランスで目に付くような、国土が裸であるという印象は受けない。」(六〇)「イギリスについて言うなら、刈り取られた裸の様相を呈しており……」(六八)

13 寒村——「田舎の人々は村で生活するというのが、ヨーロッパに広く行き渡る習わしなのだ。」(六〇)

14 切り出した石で造られている。——「フランスでは」四十、五十もの町や村が一望されることが珍しくないが、そのすべてが石造りなのだ。……建物の控え目な色合いが風景を和らげ、全体を荘厳で威厳のあるものにしてくれる。」(五四)「風景を飾るには、より地味でより俗悪でない石の色合いこそが我々の好みなのだ。」(五九)

15 生け垣——「通常、我が国には生け垣はなくて……」(五三)

16 公園と呼んでもおかしくはない。——「旧世界の森は」手入れが行き過ぎ、公園の敷地のように清掃がなされ、きれいに刈り込んでいる。」(六〇)「とりわけドイツの風景は、公園のような風景と言いつらわされる風景の典型とされる。」(六〇—六一)

17 さらに三つの寒村が、丘の斜面に……寄り集まっている。——「(ヨーロッパの南の国々では)灰色で地味な色でありながらはつきりとした輪郭の村々が、岩山の頂上にぽつんとあったり、その側面にいわばへばりついているように見えることがしばしば

ある。……風景に特異な美を与えずにはおかない。」（六七）

18 尖塔もしくは教会の低い塔が、こうした寒村のほとんどの上にそびえ立っているのが見える。——「〔カソリックの国々では〕町は灰色の城郭風の輪郭を持ち、……ほとんどいつでも、教会の高い尖った屋根、堂々とした尖塔の周囲に寄り集まっている。」（六九）